



チャハルモンゴル語における固有語と外来語のアクセントについて

金, 正琳

(Citation)

神戸言語学論叢, 14:1-15

(Issue Date)

2024-03-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487305>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487305>



チャハルモンゴル語における固有語と外来語のアクセントについて*

金 正琳

南開大学

1. はじめに

本稿の考察対象であるチャハルモンゴル語は、中国の内モンゴル自治区で使用されているモンゴル語の標準語であり、母音調和や文字（書き言葉）と音声（話し言葉）の乖離などの特徴を持つ。

チャハルモンゴル語のアクセントは、様々な先行研究で議論されているが、アクセントの種類や位置などについて、多様な見解が見られており、未だに合意に至っていない。チャハルモンゴル語にアクセントが存在するか、アクセントは高さによるものか、強さによるものか、また、アクセントはどの音節に置かれるのか、などの問題はまだ十分検証されていない。

本稿の目的はチャハルモンゴル語のアクセント特徴を明らかにすることである。具体的には、固有語と外来語を対象とし、母語話者の実際の発音に基づくアクセント調査を行い、以下の通りの結果を報告する。まず、固有語と外来語アクセントの相違点について、固有語アクセントは各音節語において常に第 2 音節に置かれるのに対し、外来語アクセントは 3 音節語において第 3 音節、それ以外の場合は固有語と同じく第 2 音節に置かれる傾向が観察される。また、固有語と外来語は各音節語において、アクセント位置が完全に一致するとは言えないものの、強さよりも高さを基準としたアクセント付与に規則性が求められること、そして、アクセント位置は母音の長さ、音節量とフットなどに関連性をもつこと、という 2 点が共通点として取り上げられる。これらを根拠に、本稿はチャハルモンゴル語に高さに基づくアクセントが存在すると主張する。

2. 先行研究

チャハルモンゴル語のアクセントについての先行研究では、研究者間の意見の不一致が見られる。清格爾泰 (1991) は、チャハルモンゴル語のアクセントは、第 1 音節に固定され、強弱アクセントであると述べている。これはチャハルモンゴル語のアクセントの特徴についての伝統的な観点であり、長い間主流として認識されている。しかし、確精扎布 (1993) は音響分析の結果を根拠に、チャハルモンゴル語のアクセントは常に第 1 音節に置かれるというわけではないと主張した。これも多くの研究者の間に、合意が得られた観点である。それ以降も関連の研究が続いているが、未だに明確な結論にたどり着いていない。

近年のチャハルモンゴル語アクセントについての代表的な研究に、宝・孟和宝音 (2011)、白音門徳 (2014) と呼和 (2007, 2014, 2018) などが挙げられる。チャハルモンゴル語のアクセントの性質とアクセント位置について実験調査の結果は、以下の表 1 にまとめられる。

表 1：チャハルモンゴル語のアクセントについての研究

種類	アクセントの性質	アクセントの位置
宝・孟和宝音 (2011)	高さアクセントとして実現	第 2 音節
白音門徳 (2014)	音声学的アクセントは存在せず	特定の位置はない
呼和 (2007, 2014, 2018)	複数の音声的要素で実現	母音の長さに影響される

宝・孟和宝音 (2011) はチャハルモンゴル語固有語の 1~4 音節語を対象として、アクセントを音の強さと高さの両方の観点から調査を行った。強さと高さにおけるアクセントのピークはそれぞれ 85% と 67% の割合で第 2 音節に置かれることを明らかにした。そのため、チャハルモンゴル語のアクセント位置は第 2 音節であり、高さの数値が強さより高いことから、アクセント位置は高さにより影響されると述べている。

白音門徳 (2014) は固有語の 2~3 音節語のアクセントを調査した。母音の長さで判定できないため、アクセント位置は自由に移動すると主張している。つまり、チャハルモンゴル語のアクセント位置が固定的であるという観点を否定している。また、多音節語では、語アクセントのような現象が見られるものの、それはあくまでも個人による発音特性、あるいは発音による生理的な音声の変化だと述べている。すなわち、チャハルモンゴル語の発音には音声学的アクセントという概念がないという見解を示している。

呼和 (2007, 2014, 2018) は固有語の 2~3 音節語のアクセントを母音の音色、音の長さ、強さ、高さの 4 点から分析を行った。まず、母音の長さがアクセント位置に影響を与えることを指摘し、白音門徳 (2014) の結論を否定した。次に、アクセントの性質は単一の要素によって決められず、音の長さ、強さと高さとも関連性があり、複数の要素で総合的に実現されると述べている。この点では、英語のアクセント特徴と類似性を持つ。

チャハルモンゴル語を強勢アクセントとする見解が圧倒的に多かったが、最近の研究では、高さでチャハルモンゴル語のアクセントを判断することがより合理的である、という意見も徐々に増えてきている。敖登其木格 (2013) では、チャハルモンゴル語のアクセントにおける高さによる影響は他の要素より著しいが、高さでアクセントを分類できない場合、長さや強さも有用な指標であると述べている。また、包 (2018) は固有語 2~3 音節語のアクセント位置を調査し、高さも強さも第 2 音節に置く単語が圧倒的に多く、特に高さに関しては、アクセントは第 2 音節に来るのが安定していると指摘している。

特に興味深い研究として、包 (2018) は英語、日本語に比べて、チャハルモンゴル語は強弱の差も高低の差も少ないことを報告している。その理由は、同言語のアクセントは単語の意味を区別する機能を持たないということである。アクセントが単語の意味を区別しないことは、チャハルモンゴル語のアクセントが長年にわたって研究されてきたにもかかわらず、未だに統一的な意見が得られない理由の 1 つだと考えられる。

以上に示すように、チャハルモンゴル語のアクセントについては研究者間の見解が著しく異なる。ただし、チャハルモンゴル語のアクセントは強さアクセントであり、アクセント位置は常に第 1 音節に置かれる (清格爾泰 1991) という伝統的な観点は、ほとんどの研究者に受け入れられていないことは明らかである。また、チャハルモンゴル語のアクセントが母音の長さに影響されることも、多くの研究者の共通認識である。

以上で概観した先行研究の全体像から分かるように、チャハルモンゴル語のアクセントについての研究はほとんど固有語を対象に行うものである。しかし、外来語を研究対象とする場合、どのような結論が得られるのかは明らかではない。そこで、本稿はチャハルモンゴル語のアクセントを固有語、外来語の 2 方向から分析を行うことで、先行研究のギャップを埋めながら、次の 3 つの問題を明らかにする。第 1 に、チャハルモンゴル語にアクセントが存在するか否か。第 2 に、アクセントが存在するとしたら、強さアクセントなのか、それとも高さアクセントなのか。第 3 に、固有語と外来語のデフォルトのアクセント位置はどの音節に置かれるのか。これらの問題を解決することによって、先行研究の結論を検証しつつ、チャハルモンゴル語のアクセントの再検討を行う。

3. 調査と分析

3.1. 固有語について

3.1.1. 調査対象

固有語アクセントについては、2~4 音節語を調査対象とした。具体的には、2 音節語は 21 語、3 音節語は 23 語、4 音節語は 21 語であり、合計で 65 語である。調査語の分類はすべて発音によるもの、つまり話し言葉のことである。第 1 節で述べたように、チャハルモンゴル語は、文字（書き言葉）と音声（話し言葉）の乖離が特徴である。書き言葉は母音・子音の添加と脱落、また母音融合などの変化が生じるため、話し言葉の音節数と異なる場合がある。固有語の場合、話し言葉はすべて書き言葉から予測されるので、アクセント調査は音節構造が安定する話し言葉に基づいて行う。

例えば、(1a) の ba.ga.ba.gai「熊」は書き言葉では 4 音節語であるが、話し言葉では母音・子音脱落によって 2 音節語になるので、話し言葉を基準に 2 音節語とする。(1b) は書き言葉・話し言葉とも同じく 2 音節語であるため、2 音節語に属す。なお、話し言葉において、(1b) の第 1 音節のように、分節音の変化 ([ʃi/→[ʃo]) が生じる場合があるが、それは音節構造の変化と関係せず、単純な音素変化であるため、ここでは問題にしない。

- (1) a. ba.ga.ba.gai → [ba:b.gai] 「熊」¹
 4 音節 2 音節
 b. ʃi.goi → [ʃu.goi] 「森」
 2 音節 2 音節

また、アクセントと音節量の関連性も分析対象にするため、調査語を音節構造で分類する。2 音節の 21 語を音節構造によって 6 種類 (LH、HH、LS、HS、SH、SS)² に分ける。3 音節語と 4 音節語も同様に、音節構造の組み合わせによって分類する。ただし、文字（書き言葉）と音声（話し言葉）の乖離により、固有語の話し言葉において、語頭以外の軽音節は母音脱落が生じるので、LL、HL、HLL、HHL、LLH、HLH などのような語頭以外に軽音節がある音節構造は存在しない。

被験者はチャハルモンゴル語母語話者 6 人 (A~F) である。そのうち、女性が 4 人、男性が 2 人である。被験者はすべて中国の内モンゴル自治区でアナウンサーをしている母語話者であり、その詳細情報を表 2 に示す。

表 2：固有語調査の被験者

NO.	性別	年代	出身	言語
A	女性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
B	女性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
C	女性	40代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
D	女性	70代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
E	男性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
F	男性	30代	内モンゴル	チャハルモンゴル語

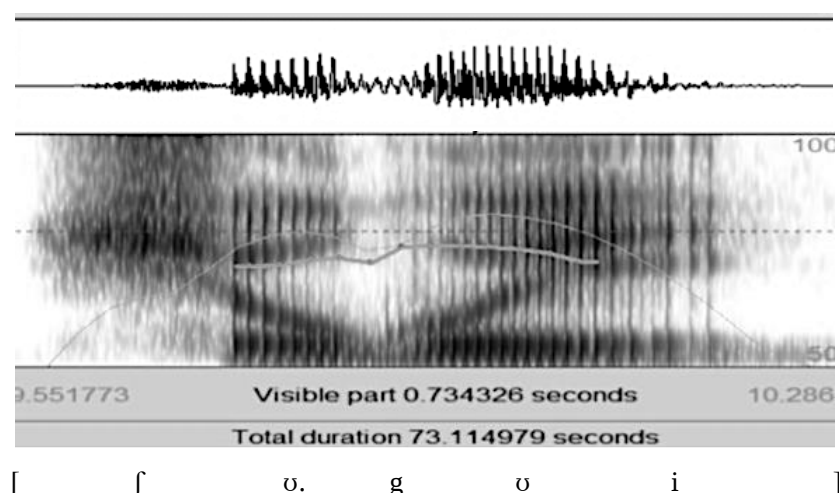
3.1.2. 調査方法

まず、調査語を文脈なしで被験者に読ませて録音した。1 つの単語を 2 回繰り返すことを指示した。続いて、録音データを音声分析ソフトウェア *praat* に入力し、分析を行った。単語の発音を強さと高さの両方から分析し、アクセントがどの音節に現れるかを各数値のピークをもとに確認した。

例えば、1 人の被験者による [ʃu.goi] 「森」という固有語の発音を図 1 に示す。図 1 におけるサウンドスペクトログラム内の上下の曲線はそれぞれ強さと高さを示す。まず、各音節のピークを見ると、第 2 音節の強さと高さのピークは明らかに第 1 音節より高いことが分かる。また、各音節の母音部分の高さと強さの平均値を計り、強さをデシベル (dB)、高さをセミトーン (semitones re 100 Hz) で表すと、第 1 音節の強さは 77.85dB であり、高さは -3.01st である。第 2 音節の強さは 80.66dB であり、高さは -0.73st である。つまり、

第 2 音節が第 1 音節より強く (80.66dB>77.85dB)、高く (-0.73st>-3.01st) 発音されることが確認できる。したがって、[fɔ.goi]「森」のアクセントは第 2 音節に置かれることができる。他の単語もすべてこのような方法を通して、アクセント位置を決めた。

図 1 : [fɔ.goi]「森」の発音



3.1.3. 調査結果

固有語 65 語の被験者 6 人による発音データはすべて 382 語である（発音ミスである 8 語を除く）。これらのデータを 2~4 音節語に分けて、強さと高さを計った結果はそれぞれ表 3 と表 4 に示す通りである。

表 3 : 固有語における強さのピーク値

音節	2 音節語	3 音節語	4 音節語	総計
第 1 音節	38% (47/124)	58% (76/132)	36% (45/126)	44% (168/382)
第 2 音節	62% (77/124)	33% (44/132)	51% (64/126)	48% (185/382)
第 3 音節	0% (0/124)	9% (12/132)	10% (13/126)	7% (25/382)
第 4 音節	0% (0/124)	0% (0/132)	3% (4/126)	1% (4/382)
総計	100% (124/124)	100% (132/132)	100% (126/126)	100% (382/382)

まず、強さを基準としたピーク値（表 3）を見ると、2 音節語は第 2 音節にピークが最も多く現れ、全体の 62% (77/124) を占めている。3 音節語は第 1 音節にピークが最も多く現れ、全体の 58% (76/132) を占めている。4 音節語は第 2 音節にピークが置かれやすく、51% (64/126) である。つまり、単語の音節数によるが、第 1 音節、もしくは第 2 音節にピークが置かれることが一般的であることが分かる。

表 4：固有語における高さのピーク値

音節	2 音節語	3 音節語	4 音節語	総計
第 1 音節	26% (32/124)	17% (23/132)	4% (5/126)	16% (60/382)
第 2 音節	74% (92/124)	74% (97/132)	79% (100/126)	76% (289/382)
第 3 音節	0% (0/124)	9% (12/132)	6% (7/126)	5% (19/382)
第 4 音節	0% (0/124)	0% (0/132)	11% (14/126)	3% (14/382)
総計	100% (124/124)	100% (132/132)	100% (126/126)	100% (382/382)

続いて、高さを基準とする表 4 を見ると、2 音節語から 4 音節語はすべて第 2 音節にピークが最も多く置かれることが観察される。それぞれ全体の 74% (92/124)、74% (97/132) と 79% (100/126) である。強さを基準とする表 3 とは異なり、高さを基準とする場合、ピークが現れる第 2 音節をアクセントのデフォルト位置と仮定することができる。

固有語 2~4 音節語アクセントのデフォルト位置の具体例を (2a-c) に示す。便宜上、デフォルトの割合がより高く、高さを基準としたアクセント位置を例に示し、IPA で表記する。

- (2) a. [a.'so:lt] 「質問」 [xa.'wor] 「春」
b. [ʃʊ.'lo:dʒ.məl] 「化石」 [bɐm.'bɐr.ʃəg] 「球体」
c. [ab.'ʃəl.dəŋ.goi] 「協調」 [i.'niəm.sug.ləl] 「笑顔」

以上から、強さと高さを基準とすれば、チャハルモンゴル語固有語におけるアクセントのピークは多くの場合、第 2 音節に置かれることが分かった。この結果は先行研究 (宝・孟和宝音 2011, 包 2018) の指摘と共通し、アクセントは常に第 1 音節に置かれるという伝統的な観点を否定することになる。しかし、アクセントは高さと同様傾向であるという先行研究の観点と異なり、同じ単語においても、強さと高さのピークが異なる音節に現れる現象が観察された。例えば、1 人の被験者の [das.xal] 「宿題」という 2 音節語の発音について、第 1 音節の強さと高さはそれぞれ 80.35dB と 8.83st であり、第 2 音節では 78.62dB と 11.82st である。つまり、強さでは第 1 音節の数値が大きく (80.35dB > 78.62dB)、ピークは第 1 音節に置かれるが、高さでは第 2 音節の数値が大きく (8.83st < 11.82st)、ピークは第 2 音節に来るという結果になる。

強さを基準としたピーク値に着目すると、2 音節語と 4 音節語では第 2 音節にピークが来ることが最も多く、3 音節語では第 1 音節にピークが来やすい。仮にデフォルトのアクセント位置が、2 音節語と 4 音節語では第 2 音節、3 音節語では第 1 音節であるとすれば、デフォルトの比率は 62% (2 音節語) と 51% (4 音節語)、58% (3 音節語) であり、およそ半数となる。裏を返せば、ピークがデフォルト以外の位置においても高い割合で現れることになる。一方、高さを基準とした場合、2 音節語・3 音節語・4 音節語のすべては第 2 音節でピークが置かれやすい。そして、デフォルトの比率は 74%、74%、79% であ

り、強さの基準に比べて非常に高い割合になる。したがって、高さを基準とした分析は、デフォルトの割合がより高く、ピーク位置はより安定する結果が得られる。

次に、デフォルト以外の場合、ピークがデフォルト位置と異なる原因について考察する。原因の 1 つは、2 節で紹介した先行研究の指摘と同じように、母音の長さが挙げられる。高さに基づく (3) において、括弧の中は、有効な発音のうち、ピークが第 1 音節に現れる割合を示す。これらの単語におけるピークはデフォルトの第 2 音節になく、第 1 音節に現れる。すべての単語において、第 1 音節に長母音があるという共通性が見られるので、長母音の影響を受けて、ピークが移動している可能性が考えられる。

- (3) ['su:.dər] 「影」 (6/6) ['tu:.lai] 「うさぎ」 (5/6) ['ʃi:d.bərt] 「決定的」 (5/6)
 ['sa:r.mæg] 「中性」 (5/6) ['bø:.rəldʒ.gən] 「木苺」 (2/4) ['si:l.məl.ʃɪn] 「彫刻家」 (3/6)

しかし、すべての長母音がピークの位置に影響を与えるとは言えない。この点は先行研究と異なる。(4) は高さに基づく例であるが、ピークはデフォルト位置の第 2 音節に現れる。(4a) を見ると、デフォルト位置である第 2 音節とそれ以外の位置に長母音か二重母音が存在し、1 つの単語内に長い母音が 2 つ以上ある。母音の長さの影響を受ける場合、ピークは長い母音がある音節に移動する可能性があるが、基本的に第 2 音節で保持されている。デフォルトの第 2 音節にすでに長い母音がある場合、ピークは移動しにくくなる制限の存在の可能性が考えられる。また、(4b) においては、第 3 音節に長母音が存在し、単語内に他に長母音がないのにもかかわらず、ピークは第 2 音節に置かれる。その原因は、長母音が第 3 音節以降に生起しているからと考えられる。ピークは第 1・2 音節に現れやすく、第 3・4 音節に長母音があったとしても、そこに移動しにくい傾向は観察される。

- (4) a. [bo.'lɪəl.dən] 「論争」 (5/6) [xø:r.'xi:.ləl.təi] 「かわいそう」 (5/6)
 b. [xa.'bɔr.dʒa:] 「春牧場」 (5/6) [ə.'sər.gu:.ʃəgʃ] 「反対者」 (5/6)

一方、強さを基準とする際に、(5) のように、前述の条件を満たしていなくても、第 1 音節へのピークの移動が生じる場合がある。例えば、第 2 音節が長母音であっても、ピークはデフォルト位置から移動し、第 1 音節に置かれる。強さを基準とする場合、ピークは第 1 音節に移動するか否か、揺れがより多く現れ、これを母音の長さだけでは十分説明できない。他の要因として、音節量や母音と子音の素性も可能性として考えられるが、関連性を見つけないかった。

- (5) ['mə.du:.ləlt] 「知らせ」 (3/6) [xø:r.'xi:.ləl.təi] 「かわいそう」 (5/6)

3.2. 外来語について

3.2.1. 調査対象

外来語アクセントの調査対象は 2~4 音節語である。2 音節語は 24 語、3 音節語は 48 語、4 音節語は 35 語であり、合計で 107 語である。固有語と同じように、アクセントと音節量との関連性を調査するため、調査語を音節構造に基づいて分類した。

外来語には元言語の音節構造を保つ制約が働くため、チャハルモンゴル語の本来の発音規則に従わないものが多い。また、発音変化は話者ごとにバリエーションが見られ、固有語と同様に予測することができない。以上の問題を避けるため、書き言葉を調査語とし、107 語を選出した。本調査は外来語の実際の発音におけるアクセントの調査を目的とするため、107 語の実際の発音された話し言葉をベースに、改めて音節ごとに分類し、それに基づいて調査と分析を行った。

例えば、(6) の $prɔ.fəs.sɔr$ 「教授」は本来 3 音節語であり、母語話者の個人差により、 $[prɔf.sɔ:r]$ 、 $[pə.rɔf.sər]$ 、 $[prɔ.fis.sər]$ の発音のバリエーションが存在する。 $[prɔf.sɔ:r]$ は母音・子音の脱落で 2 音節語になったため、2 音節語に分類する。 $[pə.rɔf.sər]$ と $[prɔ.fis.sər]$ は母音の変化が起こったが、3 音節を保つため、3 音節語に分類する。このように、実際の分析対象になるのは書き言葉の $prɔ.fəs.sɔr$ ではなく、矢印の右側の話し言葉である。

(6) $prɔ.fəs.sɔr \rightarrow [prɔf.sɔ:r] \quad [pə.rɔf.sər] \quad [prɔ.fis.sər]$ 「教授」

被験者は第 3.1 節の固有語の実験協力者と異なるチャハルモンゴル語母語話者 10 人 (A~J) で、男女各 5 人である。詳細情報を表 5 に示す。

表 5：外来語調査の被験者

NO.	性別	年代	出身	言語
A	女性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
B	女性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
C	女性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
D	女性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
E	女性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
F	男性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
G	男性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
H	男性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
I	男性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語
J	男性	20代	内モンゴル	チャハルモンゴル語

外来語アクセントの調査方法は固有語と同じく、まず、文脈なしの調査語（107 語）を 10 人の被験者に 2 回ずつ発音させ、それを録音した。そして、すべての録音データを音声分析ソフトウェア *praat* に入力し、各音節の母音部分の高さと強さの平均値を計り、強さをデシベル (dB)、高さをセミトーン (semitones re 100 Hz) で表す。各音節のピーク値をもとにアクセント位置を確認した。

3.2.2. 調査結果

10 人の被験者に 107 語を発音させ、発音ミスを除き、1005 語のデータが得られた（2 音節語：344 例、3 音節語：370 例、4 音節語：276 例、5 音節語：15 例）。最初を選定した 107 語の中に 5 音節語はなかったが、被験者の発音では母音添加が起こったため、15 語が現れた。これらのデータを音節ごとに分けて、強さと高さを計った結果をそれぞれ表 6 と表 7 のようにまとめる。

まずは、強さを基準としたピーク値を見ると、2 音節語は 69% (236/344) の割合で第 2 音節にピークが最も多く現れる。3 音節語は 47% (175/370) の割合で第 3 音節にピークが最も多く、4 音節語と 5 音節語はそれぞれ 78% (215/276) と 100% (15/15) の割合で、第 2 音節にピークが置かれる。つまり、3 音節語以外、ピークはほぼ第 2 音節に現れることが分かる。そして、ピークが最も多く現れた位置をデフォルト位置にすると、2・4・5 音節語においては第 2 音節、3 音節語においては第 3 音節がデフォルト位置になる。その中で、3 音節語のデフォルト位置の割合が 47% で、他より明らかに低いことが観察される。

表 6：外来語における強さのピーク値

音節	2 音節語	3 音節語	4 音節語	5 音節語	総計
第 1 音節	31% (108/344)	17% (64/370)	11% (31/276)	0% (0/15)	20% (203/1005)
第 2 音節	69% (236/344)	36% (131/370)	78% (215/276)	100% (15/15)	60% (597/1005)
第 3 音節	0% (0/344)	47% (175/370)	3% (8/276)	0% (0/15)	18% (183/1005)
第 4 音節	0% (0/344)	0% (0/370)	8% (22/276)	0% (0/15)	2% (22/1005)
総計	100% (344/344)	100% (370/370)	100% (276/276)	100% (15/15)	100% (1005/1005)

続いて、高さを基準としたピーク値を確認する。2 音節語、4 音節語と 5 音節語はそれぞれ 89% (306/344)、97% (268/276)、100% (15/15) の割合で第 2 音節にピークが置かれる。3 音節語は 64% (237/370) で第 3 音節にピークが最も多い。つまり、強さを基準とした表 6 と同じ傾向が見られ、3 音節語は第 3 音節に、それ以外の場合は第 2 音節にピークが現れる。したがって、2・4・5 音節語のアクセントのデフォルト位置を第 2 音節とし、3 音節語を第 3 音節にすることが可能である。また、表 6 に比べて、表 7 のデフォルト位置の割合がより高いことは明らかである。

表 7：外来語における高さのピーク値

音節	2 音節語	3 音節語	4 音節語	5 音節語	総計
第 1 音節	11% (38/344)	9% (35/370)	1% (2/276)	0% (0/15)	7% (75/1005)
第 2 音節	89% (306/344)	27% (98/370)	97% (268/276)	100% (15/15)	68% (687/1005)
第 3 音節	0% (0/344)	64% (237/370)	0% (0/276)	0% (0/15)	24% (237/1005)
第 4 音節	0% (0/344)	0% (0/370)	2% (6/276)	0% (0/15)	1% (6/1005)
総計	100% (344/344)	100% (370/370)	100% (276/276)	100% (15/15)	100% (1005/1005)

第 3.1 節における固有語のアクセントの調査結果では、特に高さにおいて、2~4 音節語のピークが第 2 音節に置かれる傾向は明らかになった。一方、外来語の調査では、3 音節語以外のデフォルト位置が第 2 音節にあり、3 音節語のデフォルト位置が第 3 音節にある傾向が見られるものの、3 音節語の第 2 音節での揺れが特に多い。また、固有語との共通点として、高さを基準とした場合、ピーク値が著しく高く、より規則性が観察される。高さを基準としたデフォルト位置の具体例を (7) に示す。

- (7) a. [fa.'rans] 「フランス」 [wəi.'rus] 「ウイルス」
b. [kəm.piə.'tər] 「コンピューター」 [mik.rə.'fən] 「マイク」
c. [bəl.'ga.ri.ja] 「ブルガリア」 [luk.'səm.bu.ræg] 「ルクセンブルク」
d. [a.'fa.ga.nis.tan] 「アフガニスタン」 [ka.'pi.ta.li.səm] 「資本主義」

デフォルト以外にピークが置かれる要因については、音節量が考えられる。すなわち、より重い音節にピークが移りやすい可能性がある。高さを基準としたピークの揺れが多く見られる 3 音節語を確認すれば、特に **LHL**、**LSH**、**HHL**、**HSL**、**SHL**、**SHH**、**SLH** などの音節構造においては、デフォルト位置である第 3 音節にピークが置かれる比率が低くなる。これらの音節構造の共通点は太字で示しているように、デフォルトの第 3 音節以外の位置において、重音節 (**H**) か超重音節 (**S**) が現れるということである。例えば、(8) は高さに基づく外来語の例である。(8b) に示すように、3 音節語のピークは音節量 (より重い音節) に影響され、位置が変動している。2 音節語 (8a) と 4 音節語 (8c) のピークの揺れはそれほど多くないが、同じく音節量の影響を受ける傾向が見られる。しかし、これは一般性を持つ特徴ではない。つまり、ピークが必ずしもデフォルト以外の重い音節のある位置に移動するとは限らない。このようなピークの揺れについてさらに調査する必要がある。

- (8) a. ['tak.ʃi] **HL** 「タクシー」 ['mos.kə] **HL** 「モスクワ」
b. ['sændʒ.mi:.tər] **SHH** 「センチメートル」 [ru.'wan.da] **LHL** 「ルワンダ」
c. ['gən.ta.mi.ʃin] **HLLH** 「ゲンタマイシン」 [in.dʒæ.næ.'riŋ] **HLLH** 「エンジニアリング」

4. 考察

4.1. 強さと高さの比較

第 3 節では、チャハルモンゴル語の固有語と外来語のアクセントを、強さと高さの基準でそれぞれ分析した。デフォルト位置に関しては、両方の基準の共通性が見られるが、多少の差異も存在する。まず、共通点として、固有語は 3 音節語を除き、ピークは強さと高さともに第 2 音節に現れる割合が最も多い。ただし、3 音節語のピークは強さでは第 1 音節に、高さでは第 2 音節に置かれる。一方、外来語のピークは強さと高さが同じであり、どちらも 3 音節語以外の場合は第 2 音節に置かれやすく、3 音節語では第 3 音節に置かれやすい。表 8 のように、高さを基準とした場合、デフォルト位置は外来語 3 音節語を除けば、ほとんど第 2 音節にある。

表 8：強さと高さを基準としたアクセント位置の比較

語種	音節	強さ	高さ
固有語	2 音節語	第 2 音節	第 2 音節
	3 音節語	第 1 音節	第 2 音節
	4 音節語	第 2 音節	第 2 音節
外来語	2 音節語	第 2 音節	第 2 音節
	3 音節語	第 3 音節	第 3 音節
	4 音節語	第 2 音節	第 2 音節
	5 音節語	第 2 音節	第 2 音節

次に、相違点としては、ピークの位置に対して、2 つの基準からの予測可能性は異なる。高さで計った結果はより予測可能性が高いということが見られる。固有語のピーク値を見ると、強さを基準としたデフォルト位置の割合が 51%~62% 程度であるが、高さを基準としたデフォルト位置の割合が 74%~79% である。それぞれの割合を見ると、後者の比率は明らかに高いことが分かる。また、外来語において、数少ない 5 音節語を除いて、強さを基準としたデフォルト位置の割合が 47%~78% を占めるのに対し、高さを基準とした結果、64%~97% という高い比率を占めている。

他に、強さを基準とした場合、例外がより多く現れる。強さのデフォルト位置の安定性が比較的に低いのにに対して、高さを基準とすると常に安定性が高い。そして、デフォルト以外の揺れを分析する際に、高さを基準とした場合、揺れはほとんど母音の長さや音節量で適切に解釈できる。一方、強さを基準とした場合、十分な説明が与えられず、未解決の問題が多く残される。すなわち、強さに比べて、高さでアクセントを分析した方が、規則性がより帰納でき、予測可能性に優れることが明らかである。したがって、本稿は高さでチャハルモンゴル語のアクセント規則を説明することがより適切であることを主張する。

4.2. アクセントと音節量

本節は、なぜ固有語と外来語アクセントのデフォルト位置が語頭以外に現れるかについて検討する。Gordon (2016)、Gordon & van der Hulst (2020) などは、アクセントと音節量の関連性について、より重い音節にアクセントが置きやすいと述べている。つまり、CV より CVC、CVV、CVCC³ などの音節がアクセント位置を担う役割を果たしやすい。チャハルモンゴル語は、単語の第 1 音節に音節量の対立が存在する。CV や CVV、CVC 音節のすべてのパターンが可能であるが、語頭以外の場合、母音脱落や子音脱落の現象により、CV 構造が常に成り立つというわけではない。したがって、語頭以外の位置は基本的に重音節か超重音節になり、アクセントが置きやすい位置である。チャハルモンゴル語の固有語アクセントについて、ピークが語頭以外の第 2 音節に置かれるのは一般的であり、これは音節量の影響だと考えられる。また、より長い単語において、第 3・4 音節は重音節か超重音節であるとしてもピークがそこに置かれ原因として、フットの存在が考えられる。これについて、第 4.3 節で詳しく説明する。

アクセントと音節量の関連性から、固有語のデフォルトアクセントを解釈できるが、外来語を十分説明できない。固有語はチャハルモンゴル語の発音規則に従うため、語頭以外はほとんど軽音節が現れない。それに対して、外来語は借用元言語の発音になるべく従うため、固有語にない音節構造を持つ。その結果、外来語の語頭以外に軽音節が現れ、軽音節にもピークが置かれる。つまり、外来語のデフォルトアクセントには、音節量があまり関係しないことがわかる。(9a) と (9b) はそれぞれ固有語と外来語の例である。(9a) は語頭以外にすべて重音節か超重音節であるのに対し、(9b) は語頭以外にも軽音節が現れている。

- (9) a. [al.'da:] 「ミス」 [sa.'xiol.sən] 「神様」 [xu.'dəl.mur.ʃin] 「労働者」
 b. [pa:p.'wa] 「パプア」 [am.mo.'ni] 「アンモニウム」 [sə.'ri.lan.ka] 「スリランカ」

語頭以外の軽音節にピークが置かれるとは言え、外来語のアクセントは音節量と全く関係ないというわけではない。3.2.2 節の最後でも述べたように、デフォルト位置からの外れは、音節量の影響も関係する。例えば、3 音節外来語のデフォルトアクセント位置が第 3 音節であるが、(8b) のように、その前に重音節か超重音節（より重い音節）が現れる場合、そこにピークが移動する現象が見られる。このような現象は一般的に生起しないが、ある程度で外来語におけるアクセントと音節量の関連性を示していると思われる。

4.3. アクセントとフット

本節はアクセントとフットの関連性を考察する。Gordon (2016) は、強弱型フット (trochaic foot) と弱強型フット (iambic foot) の 2 種類のフットが言語のアクセント位置を決めると述べている。強弱型フットは、ストレスのある音節の後にストレスのない音節が続くことで構成される。一方、弱強型フットは、ストレスのない音節の後にストレスのある音節が続く

ものである。つまり、ストレスのある音節とストレスのない音節が 2 音節で 1 つのまとまりになり、フットを形成する。例えば、Poppe (2016) は、日本語の舞阪方言のアクセント特徴をフット（弱強格）で説明している。舞阪方言における名詞のアクセント、名詞と動詞のアクセント交替は弱強格で説明できる、および東京方言と違って、舞阪方言は強弱格より弱強格が優先される、ということを指摘している。

チャハルモンゴル語において、3 音節語を除いて、ピークは基本的に第 2 音節に現れる。2 音節語はそのまま弱強型フットを形成するので、ピークは第 2 音節に決定される。そして、1 つの単語内でいくつかのフットを形成できるが、弱強型フットの第 1 強勢は左端のフットに現れる (Gordon 2016)。4 音節語は 2 つの弱強型フットを形成するため、ピークは左端のフットの第 2 音節に現れる。5 音節語は数量的に少ないが、4 音節語と同じパターンだと考えられる。

弱強型フットを導入することで、固有語と外来語の 3 音節語デフォルト位置の違いも説明できるようになる。3 音節語のフットについて、2 つの分け方、 $(\sigma\sigma)\sigma$ 、または $\sigma(\sigma\sigma)$ が考えられる。それぞれ $(\sigma'\sigma)\sigma$ と $\sigma(\sigma'\sigma)$ になり、第 2 音節か第 3 音節かにピークを置く。固有語では前者の $(\sigma'\sigma)\sigma$ を形成し、外来語では後者の $\sigma(\sigma'\sigma)$ を形成すると仮定すれば、ピークの位置も異なるパターンで現れる。このように、チャハルモンゴル語のデフォルトアクセント位置をフットの形成パターンの角度から解釈できる。具体例を (10) に示す。

- (10) a. 固有語 [(xa.'bor.) dʒa:] 「春牧場」 [(mur.'gul.) dɔ:n] 「衝突」
 b. 外来語 [fur. (ma.'lin)] 「ホルマリン」 [mik. (rɔ.'fɔn)] 「マイク」

以上の分析を採用することで、多くの例が説明可能になる。しかし、なぜ固有語と外来語の 3 音節語は異なるパターンで弱強型フットを形成しているかが問題である。本研究の調査において、固有語と外来語の実験協力者が異なるため、個人やグループのバリエーションの存在も否定できない。そのため、3 音節語の扱いについては今後の課題である。

また、金・田中 (2023)⁴ では、チャハルモンゴル語における 2 音節フットの実在性を示した。もし固有語と外来語の両方とも弱強型フットで解釈できれば、2 音節フットがチャハルモンゴル語に存在するもう 1 つの裏付けになる。

5. まとめ

本稿では、チャハルモンゴル語のアクセントについて、固有語と外来語の 2 点から分析を行った。そして、調査結果に基づき、本稿における以下の通りの 3 つの問題を解決した。第 1 に、チャハルモンゴル語にアクセントが存在するか否か。第 2 に、アクセントが存在するとしたら、強さアクセントなのか、それとも高さアクセントなのか。第 3 に、固有語と外来語のデフォルトのアクセント位置はどの音節に置かれるのか。

まず、問題 1 と問題 2 について、チャハルモンゴル語にはアクセントがあり、高さアクセントの傾向が強い。次に、問題 3 について、高さを基準とする場合、固有語のアクセント位置は第 2 音節に現れるのが一般的である。それに対して、外来語は 3 音節語のみ第 3 音節、それ以外は第 2 音節に現れる結果が判明した。

以上の結果は、チャハルモンゴル語は無アクセント言語であるという白音門徳 (2014) の主張、そして、第 1 音節にアクセントが置かれるとする確精扎布 (1993) の観点と明確に異なる。また、本稿は、高さでアクセントをより適切に説明できることを根拠とし、高さアクセントの可能性が高いことを論じた。一方、強さを基準とした場合、揺れが多く生じ、説明できない現象も多くなる。このような観点も先行研究 (宝・孟和宝音 2011, 敖登其木格 2013, 包 2018) と異なる。

また、チャハルモンゴル語のアクセントの影響要因として、母音の長さと言節量の他に、弱強型フットの可能性が取り上げられる。本稿は弱強型フットによる解釈の試みを示すことで、チャハルモンゴル語におけるフットの存在を検証した。以上の結果は、チャハルモンゴル語のアクセントは通言語的な特徴を持つことを示すものである。

今後の課題としては、固有語と外来語における 3 音節語のピークの揺れが取り上げられる。外来語アクセントは元言語の影響を受ける可能性があるため、実験協力者の外国語習得歴を調べる必要がある。また、Gordon (2016) は、強弱型フットと弱強型フットを持つ言語に、第 2 強勢の存在の可能性に言及している。具体的に、(11) に示す通りである。

(11) Osage word (Altshuler 2009)

Word level (x)
Foot level (x) (x)
xo: 'tso di: b, ni 'smoke cedar'

例のように、1 つ目のフットの第 2 音節は第 1 強勢を持ち、2 つ目のフットの第 2 音節は第 2 強勢を持つ。これに基づけば、チャハルモンゴル語の 4 音節以上の単語における第 2 アクセントの存在も調査する必要がある。他に、語アクセントと句アクセント、さらに、文のイントネーションとの関連性も調査の視野に入れることで、多様な視点からチャハルモンゴル語の音声学・音韻論の特徴を示すことも今後の課題である。

註

* 本稿は筆者の博士論文の一部を基として、修正を加えたものである。本稿の執筆にあたって、田中真一先生から多くのご指導を頂いた。ここに記して御礼申し上げる。本稿における不備や誤りは筆者の責任である。

¹ 本稿における (.) は音節境界を示す。

² L は light (軽音節)、H は heavy (重音節)、S は super heavy (超重音節) を示す。

- ³ C は consonant (子音)、V は vowel (母音) を示す。
- ⁴ 金・田中 (2023) はチャハルモンゴル語の定型歌「ホルボー」のテキストセッティングを分析し、4 音節語は 2 つのビートに揃えられる場合、2+2 で分けられ、フット (2 音節) 単位でセッティングを行う、ということを指摘している。

参考文献

- 敖登其本格. 2013. 『蒙古語喀爾喀方言重音研究』 内蒙古大学博士論文.
- 確精扎布. 1993. 「关于蒙古語重音—语音实验中间报告」 『内蒙古大学学报』 1, 1–14.
- 金正琳・田中真一. 2023. 「チャハルモンゴル語定型歌「ホルボー」のテキストセッティングと音韻・形態制約」 『音韻研究』 26, 23–30.
- 清格爾泰. 1991. 『蒙古語语法』 内蒙古人民出版社.
- 白音門德. 2014. 『蒙古語实验语音学研究』 内蒙古人民出版社.
- 呼和. 2007. 「蒙古語词重音问题」 『民族语文』 4, 58–67.
- 呼和. 2014. 「再论蒙古語词重音问题」 『民族语文』 4, 60–68.
- 呼和. 2018. 『蒙古語语音声学 research』 社会科学文献出版社.
- 包桂蘭. 2018. 「現代モンゴル語のアクセントについて」 『日本音声学会第32回大会予稿集』 291–297.
- 宝玉柱・孟和宝音. 2011. 『现代蒙古語正藍旗土語音系研究』 北京民族出版社.
- Gordon, Matthew K. 2016. *Phonological typology*. Oxford: Oxford University Press.
- Gordon, Matthew K and Harry van der Hulst. 2020. Word-stress systems. In Carlos Gussenhoven and Aojiu Chen (eds.) *The Oxford handbook of language prosody*, 66–77. Oxford: Oxford University Press.
- Poppe, Clemens. 2016. Iambic feet in Japanese: Evidence from the Maisaka dialect. *Gengo Kenkyu* 150, 117–135.